総理大臣　野田佳彦様

私は、福島県いわき市に住む女性であり母親です。子供は二人おります。結婚して子供をもち、主婦としての20年を普通に過ごしてきました。しかし、2011年3月11日の大地震と原発の大爆発を機に暮らしが一変しました。正直、あの日のことを思い出すと、原発の爆発が何回あったのか、それさえも定かな記憶がないままに、着の身着のままで車に乗り夢中で逃げたことしか思い出せません。この日本で、戦争と同じ体験をしました。娘に毛布をかぶせ、放射能にあたらないよう気をつけて、真っ暗な中、地震で壊れた道路を運転し、ひたすら南へと進みました。

あれから1年半、避難先の群馬県から自宅のある福島県に戻り、今は日々の食べ物の放射能を測りながら食べたり飲んだりする暮らしをしています。空間の線量は風の向きによって日々異なり、しかしながら、あきらかに事故前とは違う値だということが汚染されていない土地の測定値と比較することにより確認されます。やはりここは汚染地域であり、その低線量被曝からは逃れることができません。木造の自宅の中の線量は外とそれほど変わりません。どこに入っても、どこに逃れても放射能がついてきます。だから、せめて食べ物だけでも汚染されていないものを食べなければ健康が侵されるのではないかと心配です。

東電や国はいまだに汚染の情報を公開せず、時々、忘れたころに「実は…」というようなデータをテレビで公表します。昨日のことか、今日のことかと見ていれば、1年半も前の情報であり、しかし、その時の汚染がこれから30年は続きます。

私たちの息苦しい暮らしのことなど野田総理には理解することもできないと思います。なぜならば、理解し想像できるなら、止まっている原発を動かすことなんてするはずがないからです。私たちの暮らしを本当に理解する人は、原発の再稼働を実行したりはいたしません。

私たち福島の犠牲をもってしても、まだ原発の危険に目をつぶり、安全だと言って動かすのなら、まず、私たちの犠牲が無駄であり、汚染、家族の崩壊、差別、健康被害の苦しみを正式に認めて謝罪をしてからにしてください。

福島県では大勢の人々が汚染と被曝の絶望の中で自らの命を絶っています。テレビでは伝えられることのない普通の人々の命も消えています。原発の収束作業の現場では、将来のある若い人たちが命の危険を感じながら、必死にたたかっています。

子どもたちを取り巻く環境も厳しさを極めています。国は弱い子どもたちを放射能にさらすことにより安全をアピールしようとしています。学校のプール開きや、運動会、日常の校庭での体育授業などが具体的な例です。

原発は人の命の上に建つ建物です。

活断層と人の命の上に建っています。

ひとたび、事故が起きたなら、一人の総理大臣では解決できない長い年月が費やされる原発問題ですが、原発を止めることは一人の総理大臣でできることです。

　勇気をもって、命をかけて原発を止めてください。こんな苦しい、情けない思いは福島の人々だけでたくさんです。二度とあってはならないことです。

　私たち福島の犠牲に寄り添って考えるというならば、原発は間違いなく必要のないもので、安全に止まっているならば、二度と動かさずにおくことを実行してください。

　お願いいたします。

平成24年8月22日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　福島県いわき市　主婦　鈴木薫